
掌と帰り道

シズカン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掌と帰り道

【Nコード】

N75880

【作者名】

シズカン

【あらすじ】

かなわない恋から逃げ出した私。無愛想で威圧感ビシビシな大人げないあの人。すれ違う二人が帰る場所を見つけるまでの話。

「切ない・すれ違い・年の差」

1、決別と日常

1、
小鳥のさえずりが清々しい朝のこと。

清らかな朝日を感じながら、今まで住んでいた30階建てマンションに頭を下げた。

下から見あげれば見あげるほど大きな建物だ。まだ、ほんの10代の小娘が1人で住むには、あまりに広すぎて豪華すぎた住居。

「いままで、ありがとう」

頭を下げながら小さい声で呟いた。

制服も、通学鞆も、ローファーも、紺ハイソも、卒業証書も、その他もろもろの服とか靴とか、みんな置いてきた。

高校入学のためにそろえてもらったものも、この三年間の間に買ってもらったものも、全て返したかったから。

そんなものを置いてきても、あの人にとっては全然役には立たないことはわかってる。むしろゴミが増えるだけで、今までの恩を返したことはならない。そもそも、今の私に、今までの恩を返すことはできない。

だけど、いつか、貰ったものを返したいと思う。この先、何年かかっても絶対に返していきたいと思う。

なぜなら、それだけがこれから先、私とあの人の絆になっていくだろうから。

たとえ、私だけが思う一方的な絆だとしても。

「さて、いきますか」

薄手のパーカーにジーンズ。あの人の目を盗んでバイトして買った服。いつも着ているものなんかとは 比べ物にならないほどの安物。鞆も、靴も、みんなそう。

でも、これが何も持たない私に相応しい姿。身分相応というもの

だろう。

「いつてきます」

帰るはずもないのにそう言って、私は三年間を過ごしたマンションを後にした。

泣きながら歩いていると

自分の手を握ってくれる手があった。

温かくて安心することができる優しい手だった。

帰り道が分からなくなってしまうた自分にとって、その掌が全てだった。

「亜姫子、早くしないと朝ごはんに遅れるよ！！」

そう叫ぶ声が聞こえて、カーテンが勢いよく開かれた。

寝ぼけ眼の私は突然の強烈な光に、くぐもった声しか出せない。
いふなれば、吸血鬼が朝日を浴びて苦しんでいるような感じだ。

「後、五分・・・」

「ばか、後五分はこれで三回目！！ 朝ごはんに遅れるよ」

バリバリとはがれていく温かい布団たち。代わりに、冷たい空気が私に襲い掛かる。

声にならない悲鳴をあげながら、もんどりうつ私は、やはり吸血鬼だった。

はいはいぱいと、飛んでくる服たちを受け止めは着て、受け止めは着て、を繰り返していけばいつもの私の出来上がりだ。髪を整えるわけもなく、化粧など論外。

手を引かれて部屋を出る。ルームメイトの浅海^{あさみ}は陸上をしており、鈍足の私を引っ張っていても早い。食堂に入れば、まさに朝食が始まるところでギリギリセーフだった。

「浅海、亜姫子、こっちよー」

声がしたほうを見れば友人たちが揃っていた。紫^{ゆかり}は手を振っており、近くには冴子^{さくこ}や園絵^{そのえ}もいる。

「ふー、間に合ってよかったー」

「さすが浅海ね、亜姫子を引っ張ってもあんなに早いなんて」

「冴子、なんで早いつてわかるんだよ」

「あら、見えていましたわよ。ほら、あそこから」

そう言って園絵が笑う。いつもと変わらない会話。いつものメンバー。そして始まる、いつもの朝食。

変わらず過ごしてきた、大学4年生の春。麗らかな日差しを浴びながら、いつもの日々が始まるうとしていた。

さて、私が足りない頭をフルに使って、やっと入学した鳳学園大学は、中高大一貫の学校だ。

しかしながら、いつでも優秀な者にはその門を開くということでエスカレーター組みとはまた別に、大学では半数を外部から取っている。

私は、その幸運な外部生として、現在鳳学園大学に通っている。

学費は学校の鳳奨学金とバイトでまかなっているが、奨学金に頼るところが大きい。さすが有名私立とだけあって、学費なんて一般市民が払えるものではなかったが、鳳学園の奨学金も一般市民が貰える額を遙に凌駕していた。

しかも、そのお金、ある一定の成績をキープできたら返済は半額で良いというから、凄いものだ。

私が鳳学園を選んだのは、もちろん寮があつたからである。正直、寮があるところならば何処でも良かった。

高校卒業と同時に住む場所を失う予定だった私にとって、住むところの確保は重要だった。それに、ここの寮は朝と夕のご飯もついて、大変美味しいのだ！！

安易にアパートなんて借りれば、すぐにあの人に見つかつてしまう恐れがある。それだけは避けなければならない。

私かのほほん、と白いご飯を口に運んでいると、園絵が優雅に紅茶の入ったカップを置き話し始めた。

「ところで、今日の夜のご予定は、みなさま空いていらっしゃるかしら？」

「園絵が予定を聞くななんて珍しいね。金曜日の夜・・・悲しいけど、私は空いているよー」

「確かに珍しいわ。私も空いている」

物珍しそうな顔の浅海と冴子。確かに、園絵が予定を、しかも夜の予定を聞くななんて珍しい。その話を聞いて、紫だけが難しい顔をしている。

「ちよつと、そのちゃん、今日の夜つてアレでしょう？」

紫の含みのある言い方。それを聞いて、園絵がニツコリと笑った。

「あら、いいじゃありませんか。そろそろ皆さんにお知らせしても宜しいでしょう」

「う、そうだけど。アレは、一応形式つていうか、名目つていうか・・・」

いまいち、はっきりしない紫。それを見ていた園絵はため息をついて、視線を私に向けた。

「亜姫子さんは、いかがかしら？ アルバイトはあるの？」

「いや・・・今週はないから、大丈夫だよ。でも、一体なにがあるの？」

私の質問に、浅海と冴子もうなずく。隣では紫が唸っている。なんだか顔が赤い。

「もう、白状してしまっただけですが、どうせ卒業までにはお伝えしなくてはならないのですから」

有無を言わさぬ園絵の笑顔に、紫も決心がついたのか口をひらいた。

「えっと、その、私の、婚約発表会をしまーす、なんて」

「「「こんやく!?!」」」

私たちの声に驚いたのか、周囲もびくりした顔でこちらをみている。しかし、私たちはもっと驚いている。

「紫って、付き合っている人、いたの？」

「うん・・・寮に入る前から付き合っていたの。その、家同士の付き合いもかねて、結婚を前提としてね。結婚は卒業してからなんだけど、一応婚約発表だけはしておこうと思って・・・」

もじもじと恥ずかしそうな嬉しそうな紫。そんな紫と見ていると、本当に好きな人と結婚するのだということが伝わってくる。

「で、みなさんは、行かれますの？」

「「もちろん!」」」

浅海と冴子は元気よく返事を返した。しかし、私はすぐに答えることができなかった。園絵と紫が不思議そうな顔をする。

「えっと、紫の家ってたしかお金持ちだよな？」

「いちおう、ね」

「ということとは、その紫の婚約発表会ってことは、偉い人とかお金持ちとかかくるんでしょう？」

私にとって、お金持ちや偉い人というキーワードは避けるべきものだ。

それらは、全てあの人に繋がっており、警戒すべきことである。

「大丈夫。亜姫子の知り合いなんていないわ。だって、うちの親族や知人だけですもの」

「そっか・・・。じゃあ、行きたいなあ。あ、でもドレスとかない

からやつぱり・・・」

園絵を始め、私以外の友人たちは、なんだかんだいっても名家や財閥や有名企業などの家柄である。しかし、私は正真正銘の一般庶民。いや、それ以下の貧乏学生だ。

「何を言っているのよ。招待するのは私なのだから、ドレスくらいは手配させて！！」

「じゃあ、私はメイク手配ねー」

「では、私は髪を」

「なら、私はアクセサリーを選んであげるわ」

各々面白そうな顔をしている。絶対に遊ぶ気だ。間違いない。ああ、なんだか不安。

「亜姫子、ありがとね」

でも、紫の嬉しそうな顔を見ると、そんな不安もどこかへいつてしまった。

2、再会と思い出

2、

何故こんなにも一日が終わるのが早いのか、と思いながら、車は指定させたホテルに着いた。

どこの舞踏会に行くの！？ってくらいめかし込んだこの格好が、まったく浮かないほど煌びやかなホテル。むしろ、これくらいしなければ入れてもらえないんじゃないだろうかとすら思える。

園絵は美しい黒髪を生かす高そうな着物。浅海は鮮やかなブルーのドレスが細身の体を引き立てる。冴子は髪をまとめ、大人の魅力溢れるセクシーな黒のドレスに身を包んでいる。

そして、私はこれでもか！というほどキラキラする白い生地のおとなしめのワンピースだった。

しかし、髪はこの姫だ！？というほどに巻かれて結われて飾り付けられているし、靴だって恐ろしいほどかかとの高い、ついでに値段も高いとわかるものである。

園絵と紫から借りたイヤリングとネックレスも、値段的な意味で大変重く感じる。やめるダイヤ、そんなにキラキラするな。

あと、どうしてハンドバックにもダイヤがついているのか知りた
い。

顔も、化粧のおかげで誰も私だと気づかないだろう。凄いよ浅海、あなたは魔術師です。

女はみんな、こうやって化けていくのだろうか。だとしたら、みんな魔術師だよ。

魔法にかかったシンデレラのようなあと思いながら、ふらつく足で、よたよたと階段を登った。

淡いピンクのドレスを着た紫。シンプルなドレスだが、紫自身が

キラキラしているから輝いて見える。

ああ、幸せオーラが漂っている……。隣にいる男の人イケメンで、背が高くて優しそう。

まさに美男美女のカップルというやつだろうか。

一般庶民には居ずらいオーラが渦巻く会場で、私が逃げ出さないのは、紫のあんな幸せそうな姿を見ることができたからだ。

けっして、食べ放題だから、とかってわけじゃない。でも、タッパくらいは持つてくれば良かったかもしれない。明日のお昼ご飯として持つて帰りたいものだ。

ちらり、と人ばかりを見れば、園絵も浅海も冴子もその中心で楽しげにしゃべっている。

大変慣れている様子を見れば、彼女たちも紫と同様にお金持ちという部類に入っていたことを思い出す。

愛想笑いと、うなずきしかできない私は、会話なんて高度なことではない。「トイレはあちです」や「このお肉美味しいです」くらいしか返すことができないのだ。

そして、そんな返事は望まれていないことくらい分かっている。

壁の花。いや、花ですらないな。壁のバッキュームカー。

ほら、ほら、ほら、食べ物を読み込んでいきますよ。あー、ソーセージが美味しいなあ。ジャージならもつと食べられるのに。

そうやって、ドレスと満腹の悲しい関係について私が嘆いていると、突然に照明が暗くなった。

ざわつく会場。しかし、すぐにステージライトがつく。司会役のお姉さんが、マイクを持っているところを見ると、何か始まるのか。「さて、本日は当Kホテルグループの代表も、ごあいさつに来ております」

すごすぎる。ホテルの偉い人がわざわざあいさつにくるなんて。しかし、周りを見ると、さも当たり前顔をしており、さらにビツクリした。え？そういうものなの？

「それでは、ご紹介いたします。Kホテルグループ代表、かしわぎゆうと 柏木優都です」

え？

ライトが照らされ、私のすぐ横の扉が開いた。

出てきたのは、黒い髪を綺麗にセットして、黒いスーツをビシッと着こなした30歳くらいの・・・いや、正確には今年で32歳になるはずの彼。

見間違えるはずはない。だって、動けないままガン見する私と目があつたもの。

いつもかけていたシルバーフレームのメガネがなかった。

目の下のクマもない。

私の知らない人。

なのに、私を見つめた瞳だけは優しく、それだけは変わらない、
と思った。

衝撃的な一瞬の邂逅の後、彼は颯爽とステージへと向かって行った。

キラキラと光る世界を、臆することなく堂々と歩くことができる大人。

喋り始めた声も懐かしくてたまらなくて、内容なんて頭に入るはずも無かった。

そして、彼が紫に花束を渡すそのとき、左手にキラリと光るものを見つけて、おもわず会場の外に飛び出した。

卒業を控えた、中学三年の冬。両親の事故を聞いたとき、もう何

も考えることはできなかった。

駆け落ち同然で結ばれた二人だったから、親戚なんているはずもない。15歳の私は、真正正銘の天涯孤独になったのだ。

永遠に、暖かな家族の元へ帰る道を失くしてしまったと泣き、絶望していた。

そんなときに現れたのが柏木優都さんだった。

父の家は大手企業の一族であった。一人息子の駆け落ちに困った一族は、後継者として遠縁の優都さんを養子に迎え入れたそうだ。

全体的に、うちの家と父に人生を振り回された結果になった優都さんは、初めて会う私に優しくかった。

会長である祖父の命で私を保護しに来たと言い、私の手を繋いで住居であるマンションまで導いてくれた。というか、あてがわれたマンションがお隣だっただけのことなのだけど。

いなくなってしまった家族のこと。新しい家のこと。今までと違う暮らし。それらに慣れるのは容易なことではなかった。

でも、優都さんがいてくれたから、少しずつ慣れていくことができたのだと思う。

黒い髪を撫で付けて、シルバーフレームのメガネをかけたその人は寡黙で、厳格で冷たいイメージを受ける。

でも、私が寂しいときや苦しいときは、傍にいてくれた。時には手も繋いでいてくれた。

その優しさに私がどれほど救われたことか。祖父と初めて会うときだって、手を繋いで本家まで行った。本当によくしてくれた、私にとっての恩人。

だから、好きになってしまつのも、仕方がなかったのだと思う。

ホテルのロビーに着くと急に足が痛くなった。

こんな高いヒールで走ったせいか、靴擦れができてしまい、ヒリヒリと痛む。ヨタヨタとソファーに座ると、涙腺はもう一杯一杯だった。

しかし、浅海にしてもらった完璧なメイクのため、涙を落とすことはできない。

さすが、女の戦闘装備だ。心が折れることを許しはしないのか。

自分の左手を見た。

左手薬指、優都さんの指にはまっていた指輪があった場所。

高校の卒業式の日。優都さんは、お祝いとして夕食に連れて行ってくれた。

普段から夕食に行くことはあったが、その日は特別に高級な場所でドキドキした。

それから、夜景が綺麗な公園に行つて、そこでお祝いをもらった。シンプルな腕時計。とても気に入ったのを覚えている。

そして、一緒にマンションまで帰った。

ただ、その後に優都さんは仕事が入ってしまった、また出なければならなくなった。

言葉少なく、一生懸命に謝る姿が愛しくて、抱きしめたくなくなってしまふほどだった。

だから、その出かけ際の玄関で、私は思わず言ってしまったのだ。

「あ、その待つてください」

「どうしましたか？ お祝い、なにか足りませんでしたか？」

真面目な顔をして聞いてくる優都さん。無表情なんだけど、瞳は不安げにユラユラしている。

「そうじゃなくて、今日はとても楽しかったです。ありがとうございました」

「良かったです。亜姫子さんのために計画したので、楽しんでもら

えて何よりです」

そう言って微笑む優都さんを見ると、ついうぬばれてしまいたくなる。

こんな年の離れた小娘の為に、この人は今までとても丁寧にくれた。

それは、優都さんの優しさが本物だからだ。見た目は、確かにちよつと怖いっていうか圧迫感ひしひしだけど、私を見る瞳はとても優しい。

嬉しくて、愛おしくて、幸せ。だから、言わずにはいらなかった。

「好きです」

「え？」

「私、優都さんが好きです。大好きです！！」

深々と頭を下げていたから、優都さんの顔は見えない。でも、明らかに困惑した雰囲気は感じる。

思ってもみなかった、考えてもいなかった、という優都さんの困惑した空気が伝わってきた。

そんな雰囲気に耐え切れず「以上！！いつてらっしゃい」と言っ
て、玄関の扉を力いっぱい閉じた。

雰囲気とか手順とか、そういうものをすつ飛ばした、人生初の愛の告白。

玄関にへたり込むと、心臓はバクバクして、手が震えていた。
言ってしまった・・・。

戸惑った声が頭から離れない。ああ、そりゃそうか、びっくりもしますよね。妹のような存在ですものね。

恋愛対象になんて見てなかったよね。知っていました、全部わかっていました。

だから、あなたの傍を離れることを決めたのですよ。

3年前の気持ちに蘇ってきて、思わず苦笑いしてしまった。「以上！―」って、なんだそれ。

そりゃ、返事はいらないうって思っていたけど、以上って、あまりにもさっぱりしすぎだろ。

でも、あの頃は、毎日が楽しくてドキドキしていたっけなあ。ため息をつきながら、ロビーにある立派なシャンデリアを眺めた。

キラキラした世界と住人たち。

そこには、私の帰る場所も、暖かな掌もない。

あるはずがない。

「亜姫子さん」

急ぎ足で来たのだろう、普段よりも若干慌てている。

ああ、そういうところも変わらないのか。私なんかを見つけたくらいで急がなくてもいいんですよ。

でも、懐かしい。

なんだか、今日は懐かしさばかり探している気がする。

「お久しぶりです、優都さん」

だったら私だって、彼に少しでも懐かしいと思ってもらえるようにと

精一杯の笑みで迎えた。

3、暴露と眠気

3、

懐かしさ探しをしていた私は、早くもつまづくことになる。
あれ、この人誰だ？

最上階の高そうなお部屋へ、優都さんに引きずられるようにして
押し込められた。

そうして、応接間のようなところで、ソファーに座らされてから、
早30分が経とうとしている。

その間、優都さんは向かいのソファーに座り、ずっと無言を貫き
通していた。

ロビーでの私の渾身の微笑みには見向きもせず、優都さんは私の
腕を掴み、この部屋までつれてきた。

その間も、やっぱり無言。通常装備の圧迫感がさらに増大され、
殺気にまであつていた。

なんだこれ、どんな進化を遂げたんですか？こんなの見たこと無
い。

タバコを吹かしながら、ずっと眉間にシワを寄せてこちらを睨ん
でいる優都さん。

うさぎならば、五分で死んでいるだろう殺人光線に、私はただひ
たすら耐えていた。

だから、視線が自然とうつむきがちになるのは仕方のないこと
です。

3本目を吸い終わり、灰皿に押し付けながら、優都さんはため息
をついた。

あ、ここいらで、この気まずい空気からぬけだせるのか！！

「それで、今は、何をなさっているのですか」

不機嫌であるということを微塵も隠さぬ声。怖いぞ、さっきのスピーチの時みたいな優しい声は、何処に忘れてきたの？

「えっと、大学生を、しています」

「へえ、どこで？」

答えにくい質問だ。今ここでゲロってしまえば、完璧に私の居る所もばれてしまう。

でも、この別人のような恐怖の優都さんに嘘をつけるほど、私のハートは頑丈でない。

「えっと、ここから車で30分から1時間のところですよ」

「そういうことを、聞いているのではないのです。今から、六条のご令嬢にお聞きしてもよろしいのですが」

「鳳学園です！！」

六条のご令嬢というのは紫のことだ。やり方がやらしすぎる。

コイツは一体誰だ。優都さんの皮を被った、この悪魔は一体何処から来たのだろう。

もしかして、私のいない間に優都さんは改造されてしまったのだろうか。

だとしたら、悲劇だ。かわいそうだ。

「鳳学園・・・なるほど寮がありますね。ふうん、驚きました。

まさか、亜姫子さんが鳳学園に入れるほどの学力をお持ちだったとは」

はっと私を見下すように笑うソイツは間違いなくメカ優都だ。

ちよっと、おじいちゃん！！あんだ、なんてことしてくれたのだよ。前の優都さんを返せ！！

「それで、理由をお聞きしてもよろしいですよ。3年前、理由も言わずに姿を消した理由を」

耳に痛い言葉たち。チクリと胸が痛んだけど、傷ついた顔なんて

できるはずがない。

そもそも、私に傷つく資格などなかった。

「お互いのためだと、思ったからです。ちょうど18歳になったし、ひとり立ちかなって考えたの。」

あのままじゃあ、優都さんに頼りきってばかりだったから・・・

「

実際、寮での暮らしは、驚きばかりだった。初めて知ること、することばかりで戸惑ったものだ。」

特に、電車の切符の買い方が分からなかったのは大変困った。

だから、あの生活から離れたことは間違いではなかったと思う。

「それでよかったのに」

「え？」

いきなり立ち上がった優都さん。びっくりして、思わず後ろにのけぞる。

「私に頼りきっていたいけば、よかったのです」

圧迫感を増した優都さんの瞳は、どこにも優しさなんて見当たらなかった。

私が居ない間に、何があったのか。それは、もしかして、左手の指輪と関係しているのだろうか。

そう思うと、またチクリと胸が痛んだ。

手を掴まれて、そのままバスルームへ押し込まれ扉を閉められる。え、ちょ、お風呂なんて別に結構ですよ。どうせなら、出口へ案内してください。

「お友達への連絡は、こちらでしておきます。明日は土曜ですし、こちらに泊まって下さい。」

まずは、その仮面みたいな化粧を落としていただきます」

「かかか仮面って、女は魔術師なんですうー。こうやって綺麗になるの！！」

てか、何言っているのですか？私は帰ります。寮の門限もあるんです。

これ以上、罰則スタンプを増やすわけには、トイレ掃除は、もう、いやですー！！」

ドンドンとバスルームの扉を叩きながら私は叫ぶ。

寮の北トイレは半地下になっており、薄暗くてめちゃくちゃ怖いのだ。

一回だけバイトのしすぎでスタンプが貯まってしまい掃除をしたが、あれは人が入る空間ではない！！

使用する人がいないのに掃除なんて、ナンセンスだ！！

「大丈夫です。鳳学園ならば、顔がききます。外泊届けは出しておきますから、安心して泊まってください。

間違っても、逃げないで下さいね。迎えにいきますよ」

可愛げも、愛しさも消えたメガ優都に、ぐうの音も出ない私は、

お風呂へ入るという選択肢を選ぶほかなかった。

高級ホテルでのお風呂は大変に有意義であった。さすが、高級ホテルだ。ジャグジーだってあるぞう！！

洗面台には、化粧落としから、お風呂上りのスキンケア用品までばっちり揃っていた。しかも、使い心地がとてもよい！！

ドライヤーも、凄風威風の威力に一瞬で髪が乾いてしまった。マイナスイオンも一緒だからごわごわしない。

住みたい！！ここに住みたい！！

着替えの入ったカゴには、何故か下着が揃えられてありビビったが、ここまでくればなんのその、ルームウェアを着て、脱衣室の扉を開けた。

先ほどまで冷戦を繰り広げていた場所では、優都さんがパソコンを広げていた。

あ、脇にはワインが置いてある。ずるい、ずるい。

「あがりましたー・・・」

恐る恐る回り込めば、優都さんは座りながら寝ていた。なんとも器用な人だ。

でも、こんなこと前にもあったっけなあ。ああ、懐かしい。向かいのソファアに座って、優都さんを眺めれば、前と変わったようには見えない。

だけど、メガネもないし目の下のクマも薄くなっている。どうやら、前よりも仕事は落ち着いたようだ。良かった。

高校の頃は、家に帰ればこうやって、一つの部屋で一緒に過ごしていた。あ、とても健全にね。

あの頃の優都さんの主な仕事は私のお守りだったようで、よく部屋に居てくれて、私は優都さんの部屋に入り浸っていたのだ。

学校の送り迎え、お弁当作り、ついでに家庭教師と、私の世話をよくしてくれたものだ。

それと同時に、会社の仕事もしていたのだから、明らかにオーバーワークであった。

お弁当も、送り迎えも、別にしなくても良いと言ったのに、断固として譲らなかった。

あ、でも迎えだけは拝み倒して途中でやめてもらったんだ。バイトあったからなあ。

あまりにも申し訳なさ過ぎて、お夕飯だけは私が作っていた。

お世辞にも上手とは言えないものばかりだったのだけど、優都さんは美味しいって言ってくれた。

それが、とても嬉しかったんだ。

ソファアに寝転べば、眠気が襲ってくる。ああ、昨日のバイトの疲れが取れていないんだ。

本当は、優都さんを起こして、今までのことや、これからの事を話したい。

優都さんから離れていた間のこと、今の私の生活、そして今後の

こと。

そして、できるならば、優都さんからの話も聞きたい。

私が居なかった間のこと、これからのこと、今の優都さんのこと。
左手の薬指のこと。

だけど、化粧を落としてしまった今、泣かない保障なんてない。
だから私は全部に知らんふりをして、目を閉じるしかなかった。
それでは、また、明日。

4、朝食と逃亡

4、

温かい何かに、すりすりとおでこをこすりつけた。

ああ、幸せだ、温かい布団に、温かいなにか・・・ん、なんだ？
ボーっとしながら薄っすら目を開ければ、誰かの寝息が聞こえた。
なんだ、浅海がまたベッドに入ってきたのか。まったく、狭いベッドだというのに。

「もー・・・ベッド狭いんだから入ってこないでよ。寒いのは分かるけどさー・・・」

そう言いながらグイグイと温かい物体をベッドの端へ押していく。
それにしても、今日の浅海は、なんだかデカイ気がする。それに、
硬い。

「どなたと間違えておられるのかはわかりませんが、不愉快ですの
でやめてくださいませんか」

「ひい！！」

普段の寝起きの悪さなどなかったかのように、文字どおりに飛び
起きた。

反動によりベッドのスプリングではねる私。

さっきまで一生懸命押していた温かいものは、のっそりと上体を
起こした。

「オハヨウゴザイマス・・・」

「おはようございます。朝から騒がしことですね」
にこりとみせず、メガネをかけた優都さん。あ、よく知る顔にな
った。

けど、髪の毛が下してあるから、いつもよりも圧迫感がないぞ。

「えっと・・・、よくわからないんですけど」

「でしょうね。昨日、あなたはすやすやと、隣の部屋のソファで

おやすみになられていましたから」

ですよね。昨日、お風呂からあがった後、優都さんを眺めながらソファーに寝転んで、そのまま目を瞑った。

そう、だから、それは良いのだ。しかし、

「どうして、ベッドに寝ているのですか？」

「就寝するときは、ベッドでしょう」

しれっと答えるものだから、ああそうですね、と答えそうになっ
てしまったではないか。

違う、断じて違う。そういうことを聞きたいんじゃない。

だって、ベッドはお隣にも立派なものが、もう一つあるのだ。

なのに、どうして一つしか使わないのか。だけど、ああ、なんて
言おう。

「えっと・・・その・・・就寝とかっていうか・・・何でも
ないです」

じっと見つめてくる瞳に、何も言えなくなってしまうって私はうつ
むいた。

そんな私を見て、優都さんは、ため息をついてベッドを出た。な
んだか朝から気まずい雰囲気だ。

時計を見れば、まだ六時だった。今日は土曜日、朝食が出ない日。
いつもなら、もう三時間ほど眠ることができる時間だ。

部屋を出て行ってしまった優都さん。おそらく、この隣には昨日
のソファーの部屋があるのだろう。

耳を澄ましても、物音はしない。

一人取り残されてしまった私の元には、ふかふかの温かい布団が
ある。そして、私はとても眠たい。

誘惑に簡単に負けて布団に包まれば、再び夢の世界へ旅立つのは
容易なことであった。

氷点下の車内で私は、再び夢の世界に旅立った自分をくびり殺したい気持ちで一杯だった。

車の中の雰囲気は最悪、運転席の優都さんの機嫌も最悪。

唯一、あの後すっかり三時間眠った私の頭は大変すっきりしているが、この状況で、それは救いとはいえない。

むしろ、前後不覚、現状把握が無理という状態の方が絶対に幸せだ。

氷点下の車内では、息をすることもすらも苦しい。

しかし、耐えろ私。どう考えても、南極をハワイにすることは無理だ。

「素晴らしい神経をお持ちですね」

「ありがとうございます」

感情のこもっていない声。機械が喋ったような声。そう形容するのが相応しい声に、私は運転席とは反対にある左の窓を必死で見つめながら答えた。

二度寝の後、9時ちよつと前に起きた私は、テーブルに「8時以外に出るように」と書かれたメモを見つけて青くなった。

並べられた朝ごはんは冷たくなっているも美味しそうだし、用意された服は、ブラウスにカーディガン、スカートとシンプルながら質の良いものだった。

鞆も要されており、私の私物が入れ替えてあった。メモには、ドレスなどの一式はクリーニングに出しているとあり、今日の夕方には帰ってくるそうだった。

それに安心してから、慌ててご飯を詰め込んだ。

朝ごはんを抜けない自分を恨めしく思いながらも、優都さんがしっかりと朝食を用意してくれていたことが嬉しかった。

ブラウスもカーディガンもスカートも、シンプルながら質の良いものだった。

久しぶりに着る高い服は、いつものように私にぴったりでなんだ

か不思議な気持ちでした。

そうして、ようやくたどり着いたロビーでは、待たされすぎてロビーの住人になってしまったような優都さんが絶対零度の視線で私を迎えてくれたのだった。

窓から見える風景は、いつもと変わらない街。

山とか人気がないところへ連れて行かれるのかと冷や冷やしていたから、少しだけホツとする。

しかし、真の安心とは家に帰るまでなのだ。

「あの、どこに向かっているのですか？」

「家ですよ」

「家ですか・・・？」

どこだ？家なんて、今の私にとっては寮以外ない。しかし、寮のあるところとは違う場所を走っている。

私の葛藤など無視をして車はどんどん進んでいく。ここらへんは、高級住宅街であり貧乏学生の私とは無縁の場所である。

ああ、そういえばおじいちゃんの家がここら辺にあった。なるほど、家ってというのは、おじいちゃんの家か。

私が、そう結論した時、車はゆつくりとどこかの家の駐車場に止まった。

窓から見えるのは、黒を基調とした三階建ての大きな家だ。落ち着いた雰囲気と圧迫感は、なんだか優都さんみたいだ。

優都さんが車から降りたから、慌てて私も降りた。当たり前のように、その黒い家の玄関へ入っていく優都さん。

ちょ、不法侵入ですよ。ここは、純和風の屋敷である柏木本家とは、似ても似つかないですよ。

「優都さん、ちょっと待って」

急いで閉まりかけの扉を開けて中に入る。やはり、中も黒を基調とした作りである。

でも、圧迫感はなく、どこか安心できる。なんだか、懐かしい気

もする。

すでに靴を脱いで、私を出迎えるようにしてこちらを向いている優都さん。

うつすら微笑んでいるように見えるのは気のせいだろうか。

「あの、ここって・・・」

「亜姫子さん」

「は、はい」

車内の不機嫌な声とは違う、優しい声。

あの頃とかわからない呼び方。それらに、思わず泣きそうになった。私の目の前にいるのは、まぎれもなく、あの頃の優都さんだ。ずっと会いたくて、会えなかった人だ。

「おかえりなさい」

そう言って伸びてきた手は、私の手を強く握ったから

もう、涙を我慢なんてできるはずもなかった。

久しぶりの涙の決壊に、私自身も困った。

なぜ、どうして、止まらないのか。そんな私の手を引いて、優都さんはリビングまで連れてきてくれた。

靴を脱がしてくれたり、ドアをあけてくれたりして、今までの冷たさは嘘のようだ。

これが、飴と鞭なのか。だとしたら、次に来る鞭に私は耐えられるのか。涙腺は決壊してしまったというのに。

リビングらしき部屋の大きなソファーに隣り合って座った。少しすると泣き疲れてしまって、落ち着いてきた。

しゃっくりが止まり、鼻水も止まった。でも、手はまだ繋いだまま。

暖かい手、懐かしい手。正直、まだ離したくはないと思った。もっと、この懐かしさに触れていたい。

だけど、今までなかった左手の指輪の感触に気づいて、仕方なく手を離そうとした。

しかし、優都さんの手がしっかりと私の手を握っていて、離すことはできない。

「すぐにでも住めるようになっていきます。ここは、あなたの家です」

「

優しい声に温かい手、そして新しい居場所。私は、初めて会ったときのことを思い出した。

絶望の淵に立っていた私に、希望の光がさした瞬間。そして、幸せだった日々。

「私の、家・・・？」

「そうです、あなたの家です。あなただけの居場所です。」

そして、これもちまして、私はあなたの補佐担当の任を終えます」

「そう言って、小さく頭を下げる優都さん。」

私は、優都さんが今言った言葉が理解できなくて、反応ができなかった。

周りの音が消えて世界がぐちゃぐちゃになっていく。

これをもつて、たんとぅ、ほさ？ 終える？ 終わりってこと？

ああ、これが鞭というわけか。

いや、鞭ですらない。これは、ずっと決まっていたこと。

優都さんが、私のお守りの任を解かれる日。

私たちの繋がりがなくなる瞬間。その時は、いつか必ず来ると思っていた。

でも、今こうして、その瞬間を迎えるなんて、あまりにも皮肉すぎる。

彼が私に縛られるのが嫌だったから私は、あの日家を出たのだ。

だから、これは、ある意味望んだ結末。

でも、でも、でも、できるならこんな瞬間を迎えたくはなかった。

繋がりが断ち切られる日なんて永遠に知らないままがよかった。知らないまま、一人で小さな繋がりを大切にしながら暮らしていたかった。

優しい声も暖かい手も微笑みも、大好きだった。

でも、本当の彼は、優しくも暖かくもないのだ。

少なくとも、仕事で任された子どものお守りでもない限り、彼は優しくなんてない。

それなのに、私はそんなところが大好きになって、恋なんかしてしまった。

今も、泣いたりなんかして、手を久しぶりに握ったのが嬉しかったりして

あまりにもバカみたいだ。

「それと、」

「わかりました。結構です」

なんとか絞り出した声で、優都さんの言葉を遮った。

これ以上、仕事の言葉なんて聞きたくない。手を振り解いて立ち上げれば、驚いたような表情の優都さん。

そんな優都さんを見下ろして、私は微笑んだ。一世一代の優しい笑み。

「このお家、いただきます。ありがとうございます。優都さん、今までありがとうございます」

深々と頭を下げれば、初めて告白したときのことを思い出す。

ああ、私の軟弱者！！さっき散々泣いただろう！！

また泣きたいのなら、あとで、もう一生分泣けばいいんだ。

「さようなら」

よいい、ドン！！のように走り出した私に、さすがの優都さんも反応できなかった。

5、泣き虫と掌

5、

泣きながら、高級住宅街を歩く女。

あまりにもシユールな図に、自分でも笑えてくるが、今は泣きたい気持ち強い。

優都さんの、お仕事だったのだ。

私に優しいのも、全部、お仕事の範囲だった。

そんなのは、知っていたはずだった。でも、心のどこかでは、期待していた。

だって、本当にあの人は優しすぎた。

だから、逃げてからも期待していた。きっと見つけてくれるって。いつだって、あの人の一番は自分だって。

そんな風に思っていたから、私は左手の薬指を見たときに、とてつもないショックを受けたんだ。

諦めるって、優都さんの幸せを願うっていいながらも、私のことを気に留めていて欲しいってずっと思っていた。

好きになってももらえなくとも、優都さんの優先順位の一番に居続けたかった。

いつだって、帰る場所は優都さんの隣が良いと思っていた。

子どものわがまま以外のなにものでもない本音は情けなすぎて、また涙がでてくる。

公園やお店らしいものが、中々見つからず途方にくれた。

どこかに座って、ゆっくりと泣きたいというのに。泣きながら歩くのって、まるで迷子じゃないか。

迷子と考えると、また戻ってきてしまったと思った。

両親が死んで、帰る場所を失くして、道を迷い歩く。何処にもいけない悲しさ、苦しさ。

ああ、もう、いやだよ。どこかに、帰りたい。

とりあえずは、このまま鳳の寮へ帰ってしまおうと考えた。

女子寮は男子禁制であるし、鳳という、しっかりしたところならば、優都さんや柏木の家の者も手出しできないだろう。

優都さんがくれると言ってくれたあの家には、申し訳ないが、戻りたくはない。もしかしたら、もう二度と行かないかもしれないと思う。

だって、あまりにも衝撃的な思い出を、たった今つくってきてしまった家だ。

二度と、あのリビングのソファーには座りたくない。あそこは、私の帰る場所ではない。帰りたくない。

ぜったいに、帰らないぞ。

「亜姫子さま？」

さあ、寮に帰ろうと意気込んでいると、後ろから誰かに呼ばれた。こんなところで一体誰が？と振り向くと、スーツを着た男性が車の中から驚いたようにこちらを見ていた。

「か、か、か、和馬さん！？」

「やはり、亜姫子さまですね。御久しぶりでございます」

眩しいほどの笑顔で私を見ているのは、おじいちゃんの第一秘書せとかずまの瀬戸和馬さんだ。

一見すると優都さんと同じ年に見えるが、私と大して変わらない年齢。

だけど、さりげない気遣いのできる大人であり、私の憧れる人でもある。

「ど、ど、どうして、ここに？」

「柏木の御屋敷から用事に行くところです」

そう言つと、車から降りてきた和馬さんは、あらためて深々とお辞儀をして、車の後部座席へのドアを開けてくれた。いや、別に乗る気ないんですけど・・・。

「久しぶりにお会いしましたし、亜姫子さまはどちらかに行かれるご予約ですか？」

「いえ、そういうわけでは・・・。帰るところ、でした」

「でしたら、お送りいたします」

につこりと、優しい笑みを向けられれば嫌ですなんて言えるはずもなく、愛想笑いをしながらしぶしぶと車に乗り込んだ。車が動き出せば、窓の景色は流れていく。

「一ヶ月ぶりでございますね」

「そうですね、前回はおじいちゃんへの報告でしょうか」

私の現保護者であるおじいちゃんへの報告は、一人で暮らすための大切な義務である。優都さんに気づかれず大学受験をすることができたのも、おじいちゃんのおかげだ。

「そういえば、優都さんに見つかってしまったようですね」

さらに、と私が今もつとも考えたくないところをつく和馬さん。表情は見えないけれど、明らかに楽しんでいる様子だ。

く、くそう。そうか、だから、何故私が此处に居るのかを最初に聞かなかったのか。

「見つかつたというか、偶然見つけれちゃいました。それで、あのう、おじいちゃんには・・・」

「はい、しっかりご報告いたしました」

「鬼・・・」

ああ、もう駄目だ。私の一人暮らしは終わった。

優都さんに見つかからないという条件で、私は一人で生活することを許されていたのだ。

見つかつてしまった今、私の生活は終わってしまうのだろう。

「優都さんから、お住まいの話をお聞きしましたか？」

「え？ああ、あの黒くて大きい家ですね。」

「あんな立派なもの・・・ちよつとやりすぎじゃないですか。」

「ドデカイ家を思い出しながらため息をついた。」

「おじいちゃんは、一体いつからあんなものを用意していたのだろうか。恐ろしい人だ。」

「それに、あんなものの紹介までを優都さんの仕事にしないでほしかった。そうすれば、衝撃的な思い出を、あの家で作らずにすんだものを。」

「そうですか？優都さんも気に入っておられましたよ。」

「いや、別に優都さんが気に入る必要はないんじゃない。それよりも、自分の家のことを考えなきゃ駄目でしょう、優都さん。」

「そういえば、優都さんは今もあのマンションに住んでいるのだろうか。」

「優都さんとは、ご一緒ではないのですか？」

「いや、その、色々とありまして・・・。」

「曖昧に笑えば、先ほどのやり取りが思い出される。あ、ヤバイ、また視界が歪んできちゃった。」

「どうしよう、止まらない、みたいだ。そういえば此処、落ち着いて座れる場所だし。」

「どうされました！？」

「いきなり泣き出した私に慌てる和馬さん。困らせてしまおうとわかっているのに、涙は止まってくれない。」

「それどころか、安心して泣ける場所を見つけてしまって、さっきよりも酷くなる一方だ。」

「車を道の脇に止めて、和馬さんが運転席から後部座席に移ってくる。」

「直ぐにハンカチを出すあたり、さすがと言わざるを得ない。」

「優都さんと、何かありましたか？」

「何か、と言われても答えようがない。そもそも、私たちには何も」

無かった。

「ゆう、と、さんは、どうし、て、ゆびわを、して」

それでも、優都さんのことが気になってしまいう私は、バカだと思
う。

だって、気になってしまふのだから仕方がない。

「え？あれは、マリッジリングだと仰っていましたよ」

ああ、やっぱり。やっぱり、そうだったのか。決定的な一撃を、
ありがとう和馬さん。

決定的な一撃により、一層酷くなる私の涙。それにより和馬さん
は黙ってしまった。

これじゃ、駄目だ。早くどうにかしないと。

「あ、あの」

「はい、なんでしょうか。なんでも言ってください」

優しい返事に、思わず心のうちにあった願望を言ってしまった。

「手を、握っていて、下さい」

「・・・わかりました。これで、貴女が泣き止むのならば」

そつと、暖かい感触で手を包まれる。優都さんの感触とは全然違
った。

その違いを認めたくなくて涙はどんどん溢れてくる。諦めなくて
は、ならないのに。

誰かにすがらなくては、泣き止むことすらできない自分に腹が立
った。

一人で生きるなんて言いながら、結局いつも誰かに頼っている。

「一人だなんて、思わないで下さいね」

ポンポンと優しく頭を撫でられる。

こうして甘やかされてしまつては、頼ってしまうじゃないか。

「甘えても、良いのですよ。私も、貴女の祖父である柏木顧問も、
そして優都さんも、貴女を甘やかすためにいるのですから」

「でも、でも、私は」

甘えすぎてしまいませんか。

帰る場所の無い私が居ては迷惑でしょう。

どこにも行けない私は、そこに居ついてしまいます。

「大丈夫です。貴女の、帰る場所は」

いいえ、私の帰る場所は、もう、無いです。

どこにも、無くなってしまうました。

突然開いた後部座席のドア。

「何、しているんですか」

涙で歪む視界には、今一番会いたくなくて

だけど一番手を握っていて欲しい人が立っていた。

6、誤解と涙

6、

腕を掴まれて引きずられるのは、これで二回目だった。前回同様、機嫌の悪い優都さんからは、殺気らしいものが見える。

頼みの綱だった和馬さんは、私を簡単に優都さんへと引渡し、大変良い笑顔で見送ってくれた。やはり、あの人は鬼であったのだ。

「あの・・・どこに向かっているんですか」

高級住宅街を突き進んでいく優都さん。その迷いのない進み具合に若干の不安を感じ、私は恐る恐る聞いてみた。

「・・・家に帰ります」

「嫌です！！」

何を言っているのか、このメカ優都め！！今、一番行きたくないところである黒い家のことであると察した私は速攻で拒否する。行つてたまるか。

「嫌です。あの家には行きません。行くならば、優都さんが行つてください」

「一人で行つても意味がないでしょう」

「いやですー。いやだ、いやだ、いやだー」

再び涙声になりながら、拒絶の言葉を発する私。

そんな私の声など聞こえないとばかりに、歩き続ける優都さん。

閑静な高級住宅街ですることじゃないだろう。

「子どもではないのですから、少し静かにしてください」

呆れた目で私を見る優都さん。腕と掴む手は緩む気配がない。むしろ、ギリギリと強まっていくようだ。

「子どもです！！あなたよりも、10歳も下なんです！！そこそこ分かってください」

もう、よくわからない懇願としか言えない言葉。

二十歳過ぎたら歳なんて関係ないだろうとは思っけど、もう私にはこれくらいしか反撃は思いつけなかった。

その途端、止まってしまった優都さん。

止まったときに腕が離されていたから、私は勢い余って、大きな背中に激突する。痛い。

「・・・知っています」

今にも消え入りそうな小さな声が聞こえた。直ぐ近くにいなければ聞こえないくらいの声だった。

「だから、今まで待ちました。貴女が望むならなんだってできる。でも、」

くるり、とこちらを向いた優都さんの目は切なげに歪んでいた。なんで、どうして、あなたが泣きそうな顔をしているんですか。

「ここをまっすぐ行けば、さっきの家です。貴女がいららないと言っても、あれは貴女のものなのです。どうしても、貴女へ渡したかったものです。それと、」

そう言って、優都さんは左手の薬指から指輪をはずした。そして、それを私の手に乗せてきた。

「これも」

「これって、マリッジリングじゃ・・・」

困惑しながら優都さんを見ると、どこか困ったように微笑んでいた。

「駄目ですね。舞い上がってしまったって、つい勢いで買ってしまいました。三年前のデザインですから、古いですよ」

へえ・・・と言いながら優都さんが乗せてくれた指輪を見つめた。これを与えるといっても困る。

だって、これは優都さんの結婚指輪じゃないか。そんな大事なものを貰っても・・・ってまさか!?

そこで私は、ある仮説を思いついてしまった。

上司の孫娘を怒らせてしまったと思った優都さんは、もしかして

凄い責任を感じてしまったのかもしれない。

そして、そのため今の結婚生活を捨てて私の世話役を続けようとしているのではないだろうか。

瞬間的に至った結論は、私の背筋を凍らせた。

どうして、私はいつも優都さんの幸せを壊すことしかできないのか。

「いいいいりません！！優都さん、こういうことは一人で決めてはいけないと思います。」

じつくりと、相手と話し合ってからでないと」

「でも、貴女が言ったのですよ。だから、」

一体、私が何を言ったのだろうか。だめだ、混乱している頭では思いつけない。何を言った私。

何か、優都さんを追い詰めることを言ってしまったのか。だとしたら、早く否定しなくては。

「優都さん、それ無しです！！」

「え？」

ビシっという音がしそうなほど動揺した優都さん。凍りついた優都さんの表情を尻目に私は必死で言葉を続ける。

「えっと、そう！！勢いです。つい、感極まって言ってしまったことですよ。」

口からこぼれた戯言です！！信じないで、信じちゃだめ！！」

必死で訴える私。果たして、私の誠意は伝わるのか。いや、伝えなければならぬ。

今こそ、ずっと言えずにいたこと話してしまおう。

「私、あの頃、ずっと苦しかったんです。優都さんと居られるのは嬉しかったけど、優都さんは凄く疲れていた。」

そんな優都さんを見るのは、とても辛かった。だから、これ以上迷惑をかけてはいけないと思って、家を出たんです」

半分は本当で、半分は嘘の理由。優都さんを見ると辛かったというのは本当だ。

でも、それは叶わない恋を思つて辛かったというのもある。だけど、今それを口に出すのは得策ではないだろう。

「今の優都さんは、やつれてもいないし、疲れてもいません。だから、どうか」

私の説得は通じるだろうか。でも、優都さんは、優都さんだけは、幸せになつてほしい。私の大好きな人だから。

私の隣にいたくとも、幸せで居て欲しい。それは、あの頃からずっと変わらない私の願いだ。

「どうか、お願いします。優都さんは、幸せになつてください。私なんかにかまわず、幸せに暮らしてしてくだ、さ」

「もう、いいです」

小さくため息をついた優都さん。わかつてくれたのだろうか。優都さんが手を伸ばした先は、私の手に乗っていた指輪。それを自分の左手薬指にはめなおす。

よかった、思いとどまつてくれたようだ。きつちりと元の場所に戻った指輪は、相変わらずに私の胸をチクリと痛くさせたけど、同時にどこかホッさせた。ああ、よかった。

なんて、私が安心してしていると、またしても腕を掴まれた。

え？え？え？今度はなんだ。なんか歩きだされても困るよ。あの家に向かっているみたいだけど。

あまりの勢いに何も言えずにしていると、黒い家が見えてきた。ああ、結局帰ってきてしまったというわけか。

それにしても、優都さんに似ている家だなあと、どこかぼんやりしながら思っていると、あつという間に家の中だった。

靴を脱いで、ドスドスと家の中を歩いていく優都さん。もちろん私も引つ張られているから、引きずられながら靴を脱ぐ。

先ほどのリビングを通り過ぎて、階段を上った。圧迫感ヒシヒシの外見とは裏腹に、内装は優しい雰囲気にするなぜが安心できるつくりだ。

二階の一番奥のドアを開けると、そこには大きなベッドが一つ。
天蓋付ベッドはさながらお姫様のベッドだ。

うわぁ、と感慨に浸る暇もなく、ポーンとベッドに投げ出された。
ホテルのベッドよりもふかかなため、投げ出されても痛くない。
すごいなぁ、と思いながら天井を見ていたら、何故だか優都さんが
押し掛かって来た。

「ちょ、重いです。それに顔が近すぎると思います」

「亜姫子さんって処女っぽいですけど、そうですか」

「はぁ？なんでそんなこと言わなきゃいけないんですか？」

キツと睨んだが、それ以上の冷たい視線に思わず小さく悲鳴をあげた。

メガ優都の光臨だ！！恐ろしい、恐ろしすぎる。

「う、未遂ですよ！！」

「その未遂という言葉は若干気になりますが、よろしい」

そう言ってスーツの上着を脱ぎ、メガネをはずした優都さん。これから、何が始まるのか。マッサージか何か？

「亜姫子さんが知っていて良いのは、私だけです」

につこりと微笑む優都さんの顔は、今までにないくらいに晴れやかで、寧猛に見えた。

「あの、つかぬことをお聞きしますが、これから、なにを？」

「決まっています。子どもを作ります。それ以外に、何が？」

質問に質問で返すのは卑怯者の手口だというのは知っているが、今はそれにかまっている場合ではない。

子どもを作る？えっと、それは、どういう意味なのか。

「本当は全て終えてからにしたかったのですが、仕方ありませんね。
結婚式で着るマタニティドレスも、きつと素敵なものがそろっていますよ。大丈夫です」

「いや、大丈夫じゃないし！！」

意味が分からないが、優都さんが変だ。壮絶に絶対的に変だ。おかしい、何を考えているのか分からない。何を言っているのかも、

よくわからない。

「優都さん、変です。おかしいです。どうしたんですか。目を覚ましてください、現実を見てください」

私の言葉を聞いて、微笑む優都さん。でも、その笑みは歪で、どこか恐ろしいものに見えた。

「おかしいのも、変なもの、目を覚ますのも、貴女の方ですよ。亜姫子さん」

そうして、着ていたカーディガンのボタンが外されていく。必死で止めようとした手はやすやすと上の方で一括りにされた。片手でも、ボタンは外されていく。

嫌だ、嫌だ、いやだ。そりゃあ、好きな人と結ばれることは乙女のたしなみとして、夢見ていた。

だけど、こんなのは酷すぎるだろう。こんな、淡々と、まるで義務みたいにされるのは、嫌だ。

「嫌です。こんなのは、変です。優都さん、どうして」
でも、優都さんの手は離れない。私は、この人に一体なにをってしまったのだろう。どうして、こんなこと、に。

歪む視界、嗚咽が止まらない。優都さんは、今、どんな顔をしているんだろう。

「私はね、勢いだとしても、口からこぼれた戯言だとしても、嬉しかったんです」

搾り出すような声は小さくて、悲痛な叫びを宿していた。

「10歳も離れた貴女から言われた、その一言が嬉しかったんです。だから、今まで待っていられた」

ボタンをはずす手がとまった。優都さんの声が、手が、震えているのがわかる。

「その一言だけを信じて、幸せにしようって決めて待っていました。だから、」

ポタ、と雫が私の顔に落ちてきた。カーディガンから手を離して、

優都さんが顔を覆っている。泣いているのだろうか。

腕が緩んで戒めが解かれた。

優都さんの手の隙間から落ちる雫は、ポツリポツリと私の顔にあたる。

声を殺して、静かに涙を落とす優都さん。

そんな優都さんを見て、私は思わず手を伸ばし抱きしめた。抱きしめずには、いられなかった。

7、彼女の恋と間違いの正体

7、

優都さんに対して明確な恋心を持ったのは、高校1年の終わり頃だったと思う。正確には、2月。忘れもしないバレンタインデーの夜。

その日は、本社に出なくてはならないと言っていたから、優都さんが帰ってくるのをマンションの自分の部屋で待っていたのだ。

なんとなく優都さんのためにチョコを手作りして、気がつけば綺麗にラッピングまでしていた。

自分の気の入れ方に若干驚きながらも、日頃の感謝の意だと思っていた。

9時過ぎに帰宅した優都さん。まっすぐにこちらの部屋に来た彼が持っていたのは、いつもの通勤用の鞆と、紙袋が2つ。中には、ブランド物のチョコが沢山。

それを見たとき、優都さんに好意をもつ女性の存在を意識し、それと同時に優都さんに好意をもつ自分にも気がついた。

好きだから、一生懸命に頑張った。食べてほしくて、好きな人に笑ってほしくて作った。

気づいてしまえば、こんなにも簡単なことだったのだ。

急いで綺麗なラッピングをとって、適当にお皿に並べて、お夕飯と一緒に出した。

「作りすぎてしまったから、食べてもらえませんか」って困った顔も忘れなかった。

だって、紙袋で一括りにされてしまいたくは、なかったから。

ぎゅって、抱きしめたら、ずしんって重たいものが体の上に降りてきた。我慢できないほどではないから、そのまま抱きしめ続けた。3年間一緒に居たけど、こんなに近づくことはなかった。いつも人1人分の距離が開いていた。

私は、それを優都さんの優しさからだと思っていただけ、本当のところは、わからない。

私たちは、どこで間違えてしまったのだろう。そして、この間違いは、正すことができるのだろうか。

あまりにも私たちはすれ違いすぎている。願わくは少しでも優都さんの本心に近づくことができたら、と思う。そう、ほんの少しだけでも。

天蓋を眺めていると、ウトウトとしてきてしまった。いけない。ここで寝たら、また面倒なことになる。今度は北極どころでは済まなくなってしまう。

寝てはいけない。

しかし、さつきから動かない優都さんは重みと一緒に暖かさも私に伝えてくる。程よい体温に、私の眠気はだんだん強くなってくる。やばい、やばい、やばい。

そうして、私が必死で眠気と戦っていたとき、むくつと優都さんが起きた。正確には、少しだけ頭を上げた。

驚いて、私は抱きしめていた手を離す。しかし、今度は私が優都さんに抱きしめられてしまった。

そして、抱きしめられたまま、優都さんと一緒に上半身を起こす。顔近いなあ・・・と思ってしまうくらいの至近距離。思わず、俯いてしまう。

「こちらを、見てください」

若干かすれてしまった声は、なんだか頼りなくて反射的に顔を上げた。目が合えば、優都さんの瞳は潤んで赤くなっている。うわあ、可愛いなあ。

「どうか、わがままを許してください。今だけ、このままで」

優都さんはそう言うのと、私の肩に顔を埋めた。私の手は、また優都さんの背中にまわる。

「貴女が、誰を好きでも良いです。それでも、俺は、貴女が好きなんです」

「え？」

思わず、素っ頓狂な声が出た。今、この人、なんて言った。

「驚いたでしょう。そうですよね、驚きますよね。でも、好きなんです。ずっと、貴女しか、いないんです」

ぎゅって、腕がしまってきて、痛い。優都さん、痛いです。それと、その話をもうちよつと詳しく聞かせてください。

「ちよ、優都さん、痛い！！」

「すみません。許してください」

「そっちじゃなくて！！」

慌てて、優都さんの肩を押す。すると、そのまま私を抱きしめていた優都さんの手もゆるくなった。

改めて、至近距離で見詰め合う私たち。・・・なんだか、照れてしまう。

「優都さんは、私のこと面倒くさいって思っているんじゃないですか？」

「どうしてですか」

恨みがましい目で、ジトツと睨まれる。いつもなら、威圧感バリバリだろうが、今日は生憎、涙にぬれた瞳が可愛らしくて、全然怖くない。

「面倒くさいと思ったら、こんなに一生懸命になりません。3年間、ずっと探していました。会長職を継ぐことになって、仕事が二倍になっても、面倒くさいなんて思ったこと、一度もありませんでした。むしろ、仕事のほうが面倒くさかったくらいです」

「ちよつと、一体、どうしたんですか」

なんなのだ。一体、これは何のドッキリなのだ。

もしかしたら、この後、後ろの扉から和馬さんとか出てくるのだ

ろうか。それくらい、この優都さんは、違いすぎる気がする。

「扉の向こうに、和馬さんがドッキリってプレートを持って待機しているんですか」

「やっぱり・・・和馬でしたか・・・」

優都さんの瞳が不穏な光を帯びた。うお、ちょっと、怖い感じが戻ってきた。

「柏木顧問も、お人が悪い。どうしても、亜姫子さんに相手がいることを黙っておられたのか・・・」

はあ、とため息をつく、優都さんは抱きしめていた腕を完全に離れた。ベッドの上で私たちは、距離をとる。

そして、改めて正座をした優都さんはまっすぐに私を見つめ、そのまま土下座をした。

・・・なんで？

「今までの失礼な言動や私の勘違い、本当に申し訳ありませんでした。これからは、どうか和馬と幸せになってください」

・・・え？

なんだろう、何かが根本的に違っているような気がする。

どうして、和馬さんの名前が出てくるのだろうか。私が、和馬さんなど幸せになれるはずがない。

「優都さん・・・その、」

なんだかよくわからないことになっているけれど、私たちの間違いの正体が、見えた気がした。

ものすごい勘違いと、小さなすれ違いと、とてつもない思い違いが、私には見えたように思えた。

8、彼の恋と決死の告白

8、

亜姫子さんを大切にしたいと思ったのは、一年目の終わり頃だったと思う。正確には、2月。忘れもしないバレンタインデーの夜。急な本社からの呼び出しで、しぶしぶ会社に行けば、その帰りに紙袋2つを和馬から渡された。

和馬曰く、「今日は、こういう日なんですよ」だそうだ。そういう和馬も、しっかりと紙袋3袋を持っていた。

帰りが遅くなり、亜姫子さんの部屋に向かった。朝の約束では、夕飯を作っていると言っていた。

最近、料理の腕を上げられたから密かに楽しみであった。

一緒に暮らし始めて一年ほどになり、ようやく緊張なく過ごせるようになってきたと思う。

柏木会長の大切な孫の世話係ということで、どうしたものかと思っていたが今ではそれなりに良好な関係を保っている。

必要以上の過保護という注文だったから、できる限りのことはしてきたつもりだ。

最初は大変だったが、今では当たり前になっっているから不思議だと思う。送り迎えも、弁当も、大切な俺の仕事。

最近では、仕事以上になっけてきている気もするけど、それがむしろ心地よい。

仕事だから、と割り切れない感情があり、それに戸惑ってしまうこともある。10歳も下の女子高生が気になるなんて、笑ってしまうだろう。

数回しか入ったことのない亜姫子さんの部屋。鍵をあければ、自分の部屋と逆の間取りになっている。

「ただいま帰りました」と言えば、「おかえりなさい」とエプ

ロンをしたままの亜姫子さんが出迎えてくれた。

その瞬間、この人を大切にしたいと思ってしまった。

なぜだかわからない。しかし、とつさに抱きしめたいと思ってしまったのだ。

さっきまで笑えると思っていたことが、いやにリアルに感じた。若干動揺しながら部屋に入った。そんな俺に気づかないで亜姫子さんは夕食の準備を始める。

ホッとしながら、洗面所に行き、顔を洗った。一体、自分は どうしてしまったのだろうか。

夕食が始まって少しすると、亜姫子さんが申し訳なさそうに食卓にチヨコを出してきた。

「作りすぎてしまったから、食べてもらえませんか」

甘いものは苦手であったが、困った顔で出されれば食べないわけにもいかない。

しかし、亜姫子さんが作ったと思うとそれがとても特別なものに見えた。一体、誰に渡すのだろうか。そう考えて、我に返った。何を考えているのか。

ああ、そうだ、この気持ちは、きっと家族へのそれに近いのだ。

亜紀子さんを大切に思う気持ちは、きっと妹に対する慈しみに近いもの。そして、受け取る相手を妬ましいと思う気持ちも、それに付随するものだ。

そう結論づけた思いは、それからずっと続くことになる。むしろ、歪に正当化されてしまったせいで、強くなる一方だった。

妹のようだからと言えば全てが許されるようで、つい亜姫子さんの前でも言っていた。

言わなければ、大切にすることはできなかったから。言わなければ、一線を越えてしまいそうだったから。

そんなこと、許されるはずもないのに。

ものすごい勘違いと、小さなすれ違いと、とてつもない思い違い。それらは、私に無意味な行動力を与え、優都さんをおかしくしてしまうほど強力だったようだ。でも、今それが見えた。

だったら、もう負けることはない。

それらを打ち消す為にも私は、今度こそ自分の気持ちをはっきりと言わなくてはならないのだろう。

まっすぐに、この気持ちと向き合って、渾身の力でぶつけなければならぬ。

でなければ、この人との繋がりには本当に消えてしまう。私は完全に、帰る場所を失くしてしまうのだ。

そう確信して、私はゆっくりと、口を開いた。

「私は、ずっと優都さんが、好きなんです」

「は？」

顔を上げた優都さんの表情は、驚き通り越して信じられないというものだった。

ここまで盛大にびっくりされたら、むしろ気持ちがいい。

「3年前のあの時から、いいえ、ずっと前から、私は優都さんが好きです。だから、優都さんがマリッジリングをつけているのを見て、とっても傷つきました」

こんな言葉で、私の気持ちは通じるのだろうか。優都さんは、わかってくれるのだろうか。

信じられないという顔の優都さんは、訝しげに口を開く。

「でも、私と暮らすのが辛かったのでしょうか」

「ええ、辛かったです。好きな人に、妹みたいなものだって言われ続けるのは辛いです」

うつと唸ってしまった優都さん。その顔を見て、なんだかいい気味だと思った。

「だから、叶わない恋を続けたくなくて、あのマンションを出たんです。優都さんに好きになってももらえないまま、そばに居続けるのは、悲しいから」

でも、離れてからは、ずっと後悔していた。そばに居るのは悲しい。でも、そばに居られないのは、もっと悲しくて苦しい。

会いたいつて何度も思っ、その度に優都さんの幸せを願った。願うふりを続けた。

そうしていくうちに、いつか本当に、優都さんの幸せを願える日が来ると思っ、たから。

でも、もうそんな日は来ない。だって今、私は私の幸せも願えるようになりたい。

「でも、亜姫子さん、あなたにとって私はきつと家族のようなものなのです。だから、その好きという気持ちはきつと勘違いですよ」
優都さんの瞳は穏やかで、どこか諦めた表情をしていた。まるで、私の言うことを信じていないというふう。

どうして、この人はもういいやって顔しているんだ。どうして、さっき言っ、てくれたことを言っ、てくれないんだろ。

どうして、あなたに私の気持ちを否定されなきゃいけない。

どうして、どうして、どうして、と考えているうちに、私のどこかで、何かが切れた。

思いやりとか、配慮っ、ていう気持ちが、完全にふっ、とんだ。

私に分かった色々な間違いが、どうして優都さんには見えていないのか。

見ようとしてくれないのか。

「勘違いっ、てなによ！！優都さんに、私の気持ちがわかるか！！私がどれだけ優都さんを大事に思っ、ているか、わかるか？ わかるは

ずがないよ！！私が好きだって言っているの。だから、」

悔しくって、悲しくって、優都さんをにらみつける。

物分りの良い大人の顔をしている優都さんは、確かに大人なのだろう。キラキラした世界を、我が物顔で進んでいく大人。

だけど、だけど私も、私だって。

「優都さんも、私が好きって言いなさいよ！！」

両手を伸ばして、優都さんの顔をつかんだ。そして、そのまま唇を重ねる。

私だって、あなたが居ないこの3年間を、大人になろうとして努力していたんだ！！

一方的に押し当てた唇を離す。もう優都さんの顔色をうかがっている余裕はない。

言うんだ。

言いたいことを、気持ち全部吐き出すんだ。

「私たち、一緒に幸せになれるんだから！！」

自分でも驚くほどの大声が出て、びっくりした。

でも、優都さんが抱きしめてきて、それどころじゃなくなった。

9、迷子たちと帰る場所

9、

自分に、帰る場所はなかった。

10歳のときに、養子として柏木本家に出されてから、俺の帰る場所はなくなった。

元々、兄弟も多かったから、自分ひとり居なくても両親は寂しがない。むしろ、本家に行けたことで喜ばれていた。

柏木の人も良くしてくれていた。でも、会長はいつだって、息子さんを探していたし、その孫のことも気にかけていた。

だから、誰も俺を待っていてはくれない、とずっと思ってきた。

帰る場所すらない俺は、きっと何も与えることはできない。誰にも必要とされない俺は、誰も幸せにはできない。だから、俺なんかが好きになったら、相手が困ってしまうだろう。

そう、思っていたのに。

亜姫子さんのたった一言の拙い好きという言葉が、そんな俺の心を変えてしまった。

初めて、誰かを幸せにしたいと思ってしまった。

自分と同じ、迷子の目をした彼女と、一緒に生きたいと思ってしまったのだ。

ベッドの上で抱き合う男女は、優都と亜姫子である。

「一生離しません。後悔しないでくださいね。ああ、でも、後悔する暇もないほど、愛します。亜姫子さんも、俺のこと愛していますものね」

「優都さん、優都さん、さっきとキャラが違いすぎます。ちょっと、私ついていけません」

「最終通告はしました。でも、亜姫子さんは逃げなかった。だから、もう逃がしません」

最終通告というのは、先ほどの勘違い発言だろうか、と亜姫子は考える。

ならば、こちらも言ってやらなくては、と優都を抱きしめる腕を強めて言う。

「それは、こちらの言葉です。私だって、もう諦めてやりません。一生、離してやりませんよ」

「ええ、望むところです」

優都の満足げな返事が返ってきたことに、亜姫子は思わず笑ってしまった。

ああ、こんなにも簡単なことだったのか。ここに辿り着くまでに、あまりに長い時間を有してしまったものだ。

腕を解いて互いに見合い、笑ってしまった。とはいっても、優都は微笑み程度であったが。それでも、その笑みはとても晴れ晴れとしたものであった。

気づいたように、優都が自分の左手から指輪をはずす。それを見て、亜姫子の表情が曇った。しかし、優都はそのまま指輪を亜姫子の左手薬指にはめた。

「3年前、あなたに好きといわれた夜に買ったものです」

「え？ え？ ええええ？」

突然の告白。亜姫子は、自分の薬指にはまっている若干大きい指輪を凝視する。優都は、どこか照れたような笑みで、そんな亜姫子を見つめる。

「その、嬉しすぎて、つい買ってしまった。元々、亜姫子さんのお世話役の役目が高校卒業まででしたので、帰ったらプロポーズでもしてみようかと……」

「私に、プロポーズ……？」

「はい」

3年前、あと1日でも決断が遅かったならば、と考えると亜姫子は悔しいような気持ちになる。

でも、翌日にプロポーズされていたとしたら、それはそれで色々
と悩むような気がする。

「だって、ずっと妹みたいだって言っていたじゃないですか」

「それは、そうでも言っていないと、色々してしまいそうだったの
で、自制心をつけるためにです」

優都の言葉に亜姫子が、え？という顔になる。

「色々って、その、えっと」

「抱きしめたり、キスしたり、ベッドに連れていった」

「あああああー！ー！！」

赤い顔して、亜姫子は耳をふさいだ。

知らなかった。微塵もわからなかった。いつでも、優都さんは冷
静な大人だった。

ブツブツと呟きながら亜姫子はうつむく。そんな亜姫子を見て、

優都はため息をついた。

「あなたがいなくなつて、私は柏木顧問に正直に打ち明けました。
亜紀子さんを愛してしまいました、と。そうしたら、あの方なんて
言ったと思いますか？」

まったく思いつかないという顔で亜姫子が首を傾げる。優都は疲
れきつた目で、遠くを見る。

「じゃあ、やる。ただし、あなたを自力で見つけられたらと。期限
は無期限。但し、定期的な見合いをすることを条件にいれられまし
た」

「えええー！？　ちょっと、おじいちゃん何言っているの。私に
は、優都さんに見つかったら一人暮らしはさせないって。だから、
全力で隠れるって。あと、1ヶ月に1回は、和馬さんに現状報告し
ていました。その時に、優都さんのお見合いの話とか、ちよつと聞
いた・・・」

「余計なことを」

お互いに全力のかくれんぼをしていた。しかも、たった一人の老人の手のひらの中で。

そのことに腹立たしさを感じながらも、優都はある意味それで良かったのだと思った。

3年前にプロポーズしていたならば、亜姫子は外の世界を見ることはなかっただろう。

それに、大学もやめさせていたかもしれない。それほどまでに、自分の執着は強い。

離してやらないと亜姫子は言った。しかし、彼女はまだ若い。だから、未だに己の中の家族愛と恋愛を取り違えているのかもしれない。

思い出は美しいままと言う。この先、付き合っていく中で、彼女がその現実気づいてしまうかもしれない。

だとしても、そのときにはもう彼女を手放すことはできないだろう。何があっても、誰がなんと言おうとも、自分は二度と彼女を逃がす気はない。それこそ、一生。

でも、今は、その結論さえあればいい。そう思って、優都は静かに笑った。

亜姫子は、己の指にはまるリングを見つめた。シンプルなデザインだが、小ぶりなダイヤが散りばめられている。そうとうな値打ちものだということが分かる。

この指輪から、優都の思いが痛いほど伝わってくる。自分がいなくなったと知ったとき、どんな顔をしたのだろう。

そして、どんな想いでこの3年の間リングを身につけていたのだろう。それを考えると亜紀子の胸はしめつけられた。

「それから、この家も私が買いました」

「え？ これっておじいちゃんからのじゃないの」

さも心外だという顔で優都は言う。

「ここは、私が手配したものです。あなたの帰る家になれば、思
って設計から全て私がしました。お気に召していただけましたか？

」

「うん、なんか、とっても懐かしいって思えた。ありがとう、あり
がとう優都さん」

そこまで言って亜姫子の視界は歪んできた。ああ、ここは安心し
て泣ける場所なのだと、そう思うと涙は止まらなかった。

泣き出してしまった亜姫子を見て、優都は抱きしめるでもなく手
を握った。

ずっと、探していた掌。亜紀子が、ずっと欲しかったもの。

無愛想だし、威圧感ビシビシだし、怖い。だけど、自分を見つめ
る目は誰よりも優しい。自分の手を握っていてくれる掌は何よりも
温かくて安心できる。

だから、私はいつだって迷子じゃなかった。帰る場所に向かって
帰り道を歩いていた。傍らには、いつだってこの掌があった。だか
ら、

「おかえりなさい、亜姫子さん」

「うん、ただいま」

私は、ようやくたどり着いたのだ。

(f i n)

9、迷子たちと帰る場所（後書き）

大人げない大人を書きたかったですが…（汗）

10歳差という設定も生かしきれないままここまで来てしまった。

優都さんは、どこまでも自分勝手な超ヘタれで、亜姫子さんは、め
そもそ迷子な頑張りやさんのつもりでした。

つもりは、どこまでいってもつもりでしかないですね。

色々ありますが、書ききれてよかったです。

最後まで、ありがとございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7588o/>

掌と帰り道

2011年1月6日00時25分発行